

障がいがあっても元気に暮らせる島を目指して——絵画展による地域理解の創出

中川 理香

《団体名》 NPO法人上島ポップコーンの会（愛媛県上島町）

《事業名》 絵画展「POP POP ART展」

障がい児を育てる親たちが NPO法人を設立

愛媛県上島町^{かみしま}は、瀬戸内海の穏やかな海に囲まれた二五の島々からなります。七つある有人島には、およそ六六〇〇人が暮らしており、そのひとつ弓削島^{ゆげしま}に「上島ポップコーンの会」があります。

私たちの活動の発端は二〇〇四年です。四町村（弓削町・生名村^{いみな}・岩城村^{いわぎ}・魚島村^{うおしま}）が合併し上島町が誕生したこ

とをきっかけに、町の保健師さんが各島へ声掛けする形で、障がい児（当時、未就学児から中学生）を育てる母親たちが定期的に集まる交流会が始まりました。二〇〇五年二月より、さらなる相互交流や情報交換を進めるとともに、地域の方々に障がい者やこの会について知っていただくことを目的に、この取り組みを「ポップコーンの会」と名づけ活動を続けています。

本会は、「障がいがあっても生まれ育ったこの島で働きながら暮らした

い」という方々の願いを叶えることを目的に、障がい児を育てる親たちにより設立されました。会名には、たとえ障がいがあっても、元気に弾ける親と子でありたいとの想いが込められています。二〇一〇年よりNPO法人上島ポップコーンの会として活動していますが、一五年までは定まった拠点がなく、活動場所の確保にその都度苦心していました。そこで、NPOとして安定的に事業を実施していくために、一四年に施設整備に着手し、翌年四月



上島町：瀬戸内海のほぼ中央に位置する上島町は、平成16年に弓削町・生名村・岩城村・魚島村の4町村が合併して誕生した。有人無人25の離島で構成され、瀬戸内海特有の温暖な気候にめぐまれる。瀬戸内海国立公園区域に囲まれ、風光明媚な景勝地。

に小規模作業所「ポップコーンのいえ」を開設しました。

仕事づくり・地域交流・余暇活動が事業の柱

本会の活動は、①障がいのある方の仕事場づくり、②地域交流、③余暇活動の三つの柱に大別できます。①としては、手づくりパンの製造販売、町役



上島ポップコーンの会の活動拠点「ポップコーンのいえ」。

場から依頼を受けて行なっている清掃や軽作業があげられます。現在、パンこね、具材の準備、ラベルシール貼り、テープ留め、清掃などの仕事を、ダウン症・自閉症・精神疾患などの障がいのある人たちが、支援員のサポートを受けながら自分のできる範囲で、分担しながら行なっています。

②は、人権などについての教育活動です。町と連携し、保育所・小学校との定期交流、高等学校訪問、地域イベントへの協力などを実施しています。ただし、これらの地域交流は、新型コロナウイルス感染症の流行により、昨年度から思うように動いていません。③は、自ら楽しみを見つけるに障がい者を対象に、ウォーキングや水泳などの健康増進活動とアート製作活動を行なっています。

助成金を活用し 展示会の運営スキルを習得

二〇二〇年は、本会の結成から一五年、法人化から一〇年、ポップコーン

のいえの開設から五年という節目の年でした。そこで、これを記念して、これまでの余暇（アート）活動で描きだめてきた絵画を展示する「POPPOP ART展」の開催を企画しました。絵画の選定や展示方法など、暗中模索している時、役場より「離島人材育成基金助成事業」の募集案内を受け取りました。この助成金を活用し、専門家などを招いて展示会のコーディネートの方や、商品化のノウハウを学びたいと思い、応募しました。

企画を運営する上でのノウハウは、アート活動を通じて知り合った（株）MIDORIYA代表の和泉明子さんに教えていただきました。自身がデザイナーでもある和泉さんは、障がい者のアート作品のブランディングにも取り組みまれています。本会の職員と和泉さんと、展示する作品や場所、見せ方などを話し合い、各自のアイデアや作品などに対する想いを汲み取りながら、少しずつ「POPPOP ART展」を形づくっていきました。

描きためてきた作品に加え、各自が保管している作品もあったため、選定の際に点数を絞ってもポリュームのある展示内容となりました。これまで眠っていた作品が、額装され、展示物として並べられているのを見ると、絵がさらに魅力的に感じられ、「ぜひ自分の部屋にも飾りたい」と思いました。

人と人とのつながりを実感した 絵画展

絵画展の広報には、フェイスブック（SNS）を活用しました。展示会に関する投稿に対しては、島外の方々から

の反響も多く、実際に多数の方にお越しいただきました。

また、上島町内の皆さんにもこのイベントを知って欲しいと考え、港や商店、掲示板など島中に絵画展のポスターやチラシを設置することにしました。そこで、展示会の情報のみならず本会の活動の雰囲気も伝わるような内容が心がけ、専門家のアドバイスもいただきながらチラシを製作しました。その結果、これまでのアート活動から生ま

れたキャラクターや手書きの文字を使った味のあるチラシができたと思います。

完成したチラシを一人でも多くの町の方々に見ていただこうと、商店の店主や町役場の担当者に直接設置のお願いをしたところ、ほとんどの方に快諾していただきました。それだけではなく、お願いに行った先の皆さんがイベントに興味を持ってくださり、期間中、知り合いを連れて来館いただくなど、多大なご協力をいただきました。住民同士お互いの顔が見える規模の上島町ならではの、人とのつながりの大切さ、強さを教えられた気がします。

絵画展は、二〇二〇年十一月一日から八日までの約一週間、弓削島の体験交流施設「せとうち交流館」にて開催しました。コロナの影響もあり時期の変更（計画時は八月に二週間にわたり開催する予定だった）や会期の短縮を余儀なくされたものの、実際に開催することができて、とても嬉しく思っています。会場では、アート作品がプリントされ



「POP POP ART展」のポスター。



絵画展当日の様様。グッズやパンの販売も行なった。

離島人材育成基金助成事業事務局より

助成金を福祉分野で活用したい、という申請事業は少なくありませんが、障がいを持った方々の絵画展を開くことで、地域住民の障がいに対する理解を深め、交流を推進する本事例の試みはユニークです。実際に、上島ポップコーンの会の方々の熱意と創意工夫によって、コロナの影響は受けながらも、絵画展が盛況だった様子が報告書から伝わってきました。

イベントの成功により、地域住民のポップコーンの会やその活動への関心が高まっただけでなく、アート作品の商品化、販売方法の習得、展覧会などの企画・運用に必要なノウハウの獲得といった、同会自体の人材育成面でも成果を残せたことは、評価すべき点です。報告書に「やり遂げた経験が今後活動の原動力となる」と記載されているとおり、これからの取り組みの広がり期待しています。

離島人材育成基金助成事業は、自治体に広報の協力をお願いしているものの、潜在的なニーズをすべてすくい上げられているわけではありません。今回、本事業をポップコーンの会に紹介し、成果に結び付けていただいた上島町役場の方々に、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

(奥村)

たマスキングテープやラッピングペーパー、本会がつくっているパンの販売などを行ない、たくさんの方々手に取っていただきました。また、会期後の撤収の作業に、交流のある弓削高校などの生徒や近隣の皆さんが、自主的に手伝いを申し出てくれたことも大変嬉しかったです。

絵画展で得たノウハウを 次なる挑戦に

上島町はもちろん、人口減少や高齢化の問題を抱える離島地域の多くでは、本土と比較して、障がいを持つ方々やその親御さんたちへのサービスに限りがあるという課題を抱えています。

す。だからこそ、今回のような企画を実践し、本会の活動を地域のさまざまな方々に知っていただけたことは、大きな意味があると思います。

「POP POP ART展」の企画・運営を通して、PRする対象や期待する効果に応じた広報手法の使い分け方など、多くのことを学びました。このノウハウを活かして、今後もさまざまなプロジェクトを立ち上げたり、地域の皆さんとのつながりを創出していくような新しい企画を積極的に行なっていくしたいと思います。たとえ障がいがあっても、生まれ育った町で安心して暮らしていける場所をつくるため、本会のチャレンジは続きます。



中川理香（なかがわりか）

上島ポップコーンの会理事長。昭和40年生まれ。愛媛県松山市出身。平成8年夫の転勤により旧岩城村（現上島町）へ移住。その後生まれた子どもがダウン症だったことを契機に、ポップコーンの会設立当初より中心メンバーとして活動している。